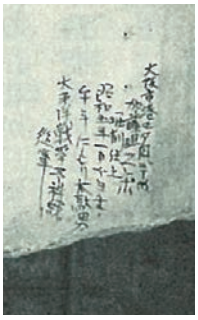
万博遺産

橋爪節也
Hashizume Setsuya

第7回 as time goes by……
――タイムカプセルの中にカプセルがもう一つ

2000年3月15日の第1回 開封式。保存状態の確認のため大阪城公園の地下からタイム・カプセルの第2号機が引き上げられ、開封・再埋設された。
写真提供／パナソニック ホールディングス株式会社



2000年の開封時に見つかった、保護枠に書かれたサイン。
写真：椹木野衣『戦争と万博』美術出版社，2005，171頁より引用（撮影／小田マサノリ）

松下館で行われた「タイム・カプセルEXPO'70」展示の様子。1階ホール中央に本体が置かれ、2階から3階は収納物の展示場となった。
写真提供／大阪府

大阪万博で松下館に展示され、閉会後に大阪城本丸の地下十五メートルに埋設された「タイム・カプセルEXPO'70」。松下電器産業（現・パナソニック）と毎日新聞社が企画製作し、自然科学、社会、芸術など、二十世紀の文化所産二〇九八点が、特殊金属製のカプセルに収納されている。カプセルは二基あり、一基は毎世紀の初頭に開かれ、すでに二〇〇〇年に一回目の開封が行われた。もう一基は、万博から五千年後の西暦六九七〇年に開封予定である。

「タイムカプセル」という言葉は、一九三九年のニューヨーク万国博覧会で、遠い未来に文明が崩壊している可能性も考え、現代文明の成果をカプセル「タイムボム（時限爆弾）」に入れ会場に埋めたことに由来するらしい。実際は「タイムボム」が刺激的なので、名称を「タイムカプセル」に変更した。

万博当時、中学一年であった私は、現代文明の成果を容器に収め、遠い未来に開封するという考えにロマンを感じた。全国の学校で、卒業生が未来の自分宛の手紙をつめた「タイムカプセル」を作ったのも万博の影響だろう。

しかし「タイムカプセル」には明るいカプセルと暗いカプセルがありそうだ。資料のデータベース化が進む現代にあって、未来に情報を伝えるロマンは薄らいだ気もするし、「タイムカプセル」を生んだニューヨーク万博は、未来社会の崩壊を意識するなど、どことなく世紀末的な世界観が漂う。

日本では永承七年（一〇五二）に〝末法〟の世に入るとされ、経典が滅びないよう経筒に収めた経塚が造られた。これも一種の「タイムカプセル」だろう。古代ローマの生活を、火山灰に閉じ込めたポンペイ遺跡も、「タイムカプセル」と言えないこともない。

二十年前の開封では、地中でそれを保護するため周囲を囲んだ枠に、「昭和五年一月十日生午年にとり太駄男　太平洋戦争予科練従軍」と書いたサインが見つかった。掘削作業をした作業員の戯筆らしい。この人は昭和五年（一九三〇）午年生まれで、万博当時は四十歳。「太駄男」は「ただお」か。

戦争体験の思いも込めたサインだが、五千年後に開封予定のもう一基の枠にも、「太駄男」のサインがあれば、未来人は私たちの時代をどう思うだろうか。

◆**橋爪節也**（はしづめ・せつや）
大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大大阪イメージ 増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（創元社）など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。